

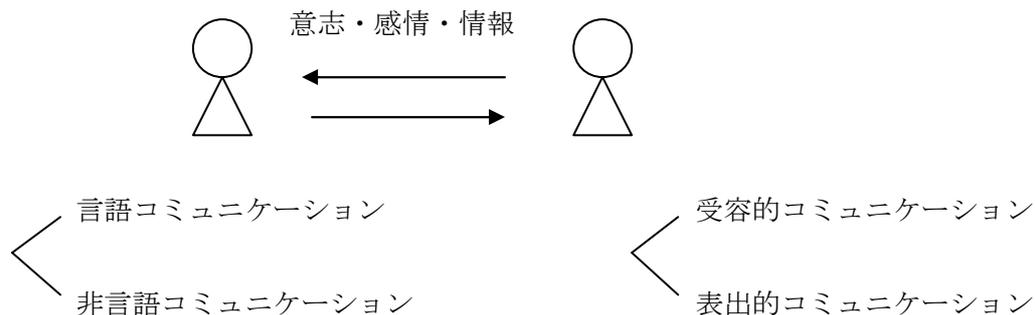
コミュニケーションの育て方

2010/02/28 山陽ABA勉強会
藤坂龍司

1. 言語コミュニケーションと非言語コミュニケーション

<コミュニケーションとは>

意志、感情、その他の情報を相手に伝えたり、相手からの情報を受け取ってそれに反応すること。



受容言語（言われたことを理解する）

表出言語（ことばを話す）

受容的非言語（絵カードやサインを理解する）

表出的非言語（絵カードやサインで意志を伝える）

<絵カードか、ことばか>

自閉症児は一般に聴覚処理より視覚処理が優れているとされ、ことばのない子には絵カードなどの「補助代替コミュニケーション（AAC）」が推奨されることが多い。時には、ことばのある子にまで絵カードを勧める行き過ぎも生じている。

補助代替コミュニケーション (Augmentative and Alternative Communication, AAC)

絵カード (PECS)、手話、筆談、音声表出装置など

ABAの療育家でも幼児期から代替コミュニケーションを積極的に勧めることが一般的。

代替コミュニケーションの使用は言語の発達を阻害せず、むしろ促進する、との研究も。

しかしつみきの会では、ロバース博士 (O.I.Lovaas) に倣って、まずことばの獲得に全力を挙げ、ことばの獲得が困難なことが判明した時に、はじめて代替コミュニケーションを用いる方針を取っている。

「ことば」を重視するわけ

AACの限界（持ち運びに不便、伝えられる情報や理解できる相手に限りがある）

ABAでトレーニングすれば、ことばを理解し、話せるようになる自閉症児はもっと多い。

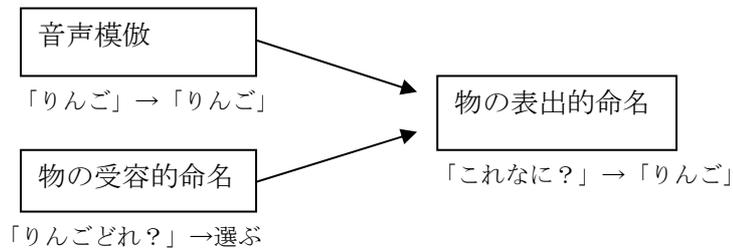
2. ことばを引き出す方法

<無発語の子どもからどうやってことばを引き出すか>

ロバース博士は無発語の子どもにことばを教えるため、まず音声模倣から教える、という方法を取った。最初は意味がわからなくてもいいから、「りんご」と言ったら「りんご」、「バナナ」と言ったら「バナナ」と忠実にまねできるようにするのである。

音声模倣と並行して、物の名前も教える。最初は「りんご」と言ったらりんごを、「バナナ」と言ったらバナナを選べるようにする（受容的命名）。それによって「りんご」という音声とりんごの実物が結びつく。

次に選んだりんごを見せて、「これ何？」と聞き、「りんご」と言えるようにする（表出的命名）。その補助手段（プロンプト）として音声模倣を使う。りんごを見せて、最初はずぐに「りんご」と言ってやる。すると子どもは「りんご」と音声模倣する。音声模倣したら強化する。それを何度も繰り返しておいて、徐々にプロンプトを減らしていく。すると最後には、りんごを見せるだけで「りんご」と言えるようになる。



<音声模倣の教え方>

ではどうやって無発語の子どもから音声模倣を引き出すのか。

ロバース博士が採ったのは、「シェイピング」と呼ばれるABAの技法である。

「シェイピング」とは、目標に少しでも近い反応を強化しながら、徐々に目標に接近していくこと。ロバース博士は次のようなステップを踏んで、目標に接近していった。

- | | |
|-------------------|-----------------------|
| ①すべての発声を強化 | 「ダダ」「ババ」「ア」「バ」「オ」 |
| ②大人の発声の直後の発声のみを強化 | 「ア」→「ダダ」「ババ」「ア」「バ」「オ」 |
| ③大人の発声に似た発声のみを強化 | 「ア」→「ア」「バ」「オ」 |
| ④大人の発声と同じ発声のみを強化 | 「ア」→「ア」 |

このようにして一つめの音を形成したら、同じ方法で、ただちに二つめの音（例えば「ン」）の形成に取りかかる。ただし実際には、動作模倣を利用し、口元を見せてまねさせたり、指でくちびるを閉じさせたりするプロンプトを補助手段として用いることが多い。

二つめの音を形成したら、次にするべきことは、この二つの音を区別させること（弁別手続き）。つまり大人が「ア」と言ったら「ア」、「ン」と言ったら「ン」と間違えずに模倣できるようにする。

この区別のためには、「ランダムローテーション」と呼ばれる方法を用いる。

「ア」「ン」「ア」「ン」「ン」「ア」「ン」「ア」「ア」「ン」・・・と二つの音をランダムに聞かせてその通りにまねできるようにするまで、訓練を続けるのである。

3. 応答の教え方

(1) 社会的応答

会話の手始めとして、「お名前は?」「何才?」「何組さん?」といった子どもがよく聞かれる質問に、決まった答えを返すことを教える。

<教え方>

①まず子どもの名前を言ってやり、まねさせる。「たつき」→「たつき」

②次に質問文を導入する。最初は小さく早口で言い、ただちに答えを大きな声で言う。それによって質問文をオウム返しされないようにする。

「お名前は? たつき」→「たつき」

③徐々に質問文を大きな声で言うようにする。と同時に答えを言ってやるプロンプトを徐々にフェーディングする。つまり全部は言わずに一部だけ言うようにする。

「お名前は?た・・・」→「たつき」

④最後にプロンプトを全くなしにする。

「お名前は?」→「たつき」

「ただいま」→「おかえり」、「いってきます」→「いってらっしゃい」、「どうぞ」→「ありがとう」などの社会的応答も同じ方法で教えることができる。

(2) 質問の弁別

「これ何?」／「何色?」、「だれ?」／「どこ?」／「何してる?」など、基本的な質問に対して、その都度適切な答えを返すことを教える。

先ほどの「社会的応答」と違って、同じ質問でもその都度答えが違うので、難度が高い。

<教え方>

①赤いコップを見せて、「これ何?」と聞き、「コップ」と言わせる。

②次に表面を指さして「色は?」と聞き、ただちにプロンプトして「あか」と言わせる。

③この時、二つの質問の違いを強調するため、声の高さやスピードを変えたり、指さしなどの仕草を付け加えたりする。

④「これ何?」と「色は?」の二つをランダムに聞き、10 試行中 9 試行以上正解できるようになるまで、トレーニングを続ける。

⑤基準をクリアしたら、他の物でも練習する。また徐々に質問の違いの強調をなくしていく。

(3) Yes/No

意志の Yes/No 「いちご、いる?」「いる／いない」

事実の Yes/No 「これ、りんご?」「りんご／ちがう」

<教え方(事実の Yes/No) >

①りんごを見せて、「これ、ぞうさん?」と聞き、すぐに「ちがう」と大きい声で言う(プロンプト)。まねしたら、強化。

②徐々にプロンプトをフェーディングして、プロンプトなしで「ちがう」と言えるようにする。

③りんごをみせて、「これ、りんご?」と聞き、すぐに「りんご」と言ってやり、まねさせる。

④この二つをランダムローテーションで練習する。

4. 自発的な話しかけの引き出し方

(1) 叙述の自発

問いかけなくても自分から物の名前を言ったり、状況を言ったりすることを促す。

<教え方>

①テーブルに子どもが名前を知っている物をいくつか並べて、子どものそばにすわる。一番端の物を指さして、子どもにも指ささせる。指さした物の名前の冒頭の音を言ってやり、子どもがその物の名前を言うようプロンプトする。言えたら、続いてその次、またその次と、順に物の名前を言って行くようにプロンプトし、最後まで言えたら強化する。

②絵本を見ながら、自分でそこにあるものの名前を言うように促す。言えたら強化する。

③自分で物の名前を言えたら、なるべく子どもの目を見ながら、笑顔で心から共感のコメントをしてあげる。そうすることで、子どもが「見た物の名前を言いたい。おかあさんに聞いてほしい。おかあさんに『そうだね』と言ってほしい」と思わせるのが目標。

(2) 質問の自発

「これ何?」「どこ?」「だれ?」「どうして?」といった質問を自発することを促す。

<教え方 (これ何?) >

①テーブルにいくつかの物を置いておく。一つだけ、子どもが名前を知らないものにする。

②端から名前を言わせていく。知らない物のところに来たら、「これ何?」と言わせる。言えたら強化する。

③「これ何?」というのが上手になったら、今度は「これ何?」と聞いた時に、その物の名前を教える。そしてその物の名前を覚えることを要求する。同じものについて「これ何?」と聞くのは連続2回を限度とし、2回も名前を教えてもらったら、三回目はそれを覚えていて、「これ何?」と言う代わりにその物の名前を言うことを要求する。

5. 子どもとコミュニケーションを取るときに大切なこと

①こちらからの話しかけは、繰り返しを避け、短い、わかりやすいことばで一度だけ言い、反応を待つ。反応しなかったら、いましている活動を制止して、もう一度話しかける。反応したら強化する。

②何でも自分で済ましてしまい、自発的な要求が少ない子どもの場合は、おもちゃやお菓子を手の届かないところに置くなどして、要求表現を引き出しやすい環境を作る。

③ことばだけではうまく伝わらない場合は、写真カードや絵カードで補う。

④年齢に合わせて、ボキャブラリーを増やしていく努力を怠らないこと。

⑤子どもは叱り過ぎると、わざと違うことを言うようになる。たとえ悪いことでも、正直に言えたら強化しよう。